学生レポート

「学生が変える日本大学」第6章
―「令和元年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」における取り組み―

磯部耕志郎[1),2)]，石原諭衣[1),3)]，竹田　匠[1),4)]，柴田謙吾[1),5)]，稲邉奨太[1),6)]
岸部美和[1),7)]，小中英樹[1),8)]

[1)]「日本大学 令和元年度学生FD CHAmmiT」学生スタッフ，[2)]日本大学危機管理学部危機管理学科３年，
[3)]日本大学法学部政治経済学科３年，[4)]日本大学商学部経営学科２年，[5)]日本大学国際関係学部国際総合政策学科１年，
[6)]日本大学生産工学部土木工学科４年，[7)]日本大学工学部電気電子工学科２年，[8)]日本大学医学部医学科３年

本稿は，日本大学における「令和元年度日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果より，学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べた活動報告書である。「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」は，一般的な学生ＦＤイベントと異なり，様々な学部から成り立っている日本最大規模の総合大学で行われるからこそ，その効果を大いに享受できる“日本大学独自の学生ＦＤサミット”と言える。第１回目の「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT 2013」から今回で７回目を迎えた。本活動報告が今後の日本大学の「学生ＦＤ活動」の更なる発展に寄与することを期待する。

キーワード：ＦＤ（Faculty Development），学生ＦＤ，「令和元年度日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」

は じ め に

「日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」（以下，CHAmmiT」とする）は，今年度で７回目になる。初年度から比べ認知度は高まり，すでに各学部には「学生ＦＤ団体」も誕生している。「CHAmmiT2018」では過去最大の参加人数を得た。今年度もその流れに乗り発展した企画を目指し開催した。ここで「CHAmmiT」の説明をしておく。簡単に言えば，「学生ＦＤサミット」の「日本大学版」であると言うことができるが，少し毛色が異なる。「学生ＦＤサミット」とは全国の各大学から十分な知識を持つ参加者が１つの大学に集い，大学教育について話し合い，学生ＦＤ活動を推進するための情報を交換する場である。一方で「CHAmmiT」とはチャットとサミットをかけ合わせた造語であり，難しく堅苦しい印象のあるＦＤと教育改善について教員・職員・学生で気軽に話し合うことがコンセプトである。今回の「令和元年度日本大学学生ＦＤ CHAmmiT」ではこれまでの６回を踏まえ，令和初ということもあり，様々な思考を凝らして取り組んだ。

投稿：2020年1月31日　　受理：2020年2月21日

1　「CHAmmiT」開催までの流れ

本節では，「令和元年度学生ＦＤ CHAmmiT」当日及び開催に至るまでの概要について報告する。令和元年４月中旬から５月中旬に学生コアスタッフ８名が公募により選出され，６月上旬から活動を開始した。途中辞退者が出てしまい，最終的には７人で活動することとなった。学生コアスタッフは，同時期に公募により選出または学部から推薦された学生スタッフ 42 名と６月下旬に顔合わせを行い，10 月中旬から本格的に協働を開始し，企画・運営の準備を進めていった。総勢 49 名で「令和元年度日本大学学生 ＦＤ CHAmmiT」のスタッフスタッフとなった。今回の学生コアスタッフは，例年問題とされていた一般スタッフとの隔たりをなくすため，協働して企画の立案に取り組んだ。スタッフ全員で話し合うことでスタッフ全員に共通意識が生まれた。以下では各ミーティングの概要を報告する。

１－１　第１回学生コアスタッフミーティング（令和元年６月８日）

本ミーティングでは，CHAmmiT コアスタッフと昨年度コアスタッフが集まった。今年度初の顔合わでは自己紹介を行い，CHAmmiT コアスタッフの熱意を共有しあった。その後，昨年度コアスタッフにより引継ぎ作業を行い，去年の反省点の共有も行った。最後に代表･副代表の決定を行い，コアスタッフの担当，「企画班」･「広報資料班」の配属を決めた。

１－２　第１回学生スタッフミーティング（令和元年６月 22 日）

本ミーティングは全スタッフが集まる最初のミーティングであった。最初は学務課の濱野泰三氏が「CHAmmiT」についての説明を行った。説明後は自己紹介を行った。休憩の後，代表挨拶とアイスブレイクを実施した。アイスブレイクでは「CHAmmiT 2018」の当日実施したアイスブレイクを採用して徐々に緊張をほぐしていった。その後，芸術学部の吉野大輔准教授がスタッフ全員が当日担当する「ファシリテーション」の説明を行った。ワークショップ形式を採用し，スタッフによる理解が進んだ。その後企画骨子の検討をしゃべり場形式で行った。例年コアスタッフが中心であったが，スタッフ全員で話し合うことでスタッフ全員に「CHAmmiT」に対する意識が芽生えた。またしゃべり場形式を採用したため，班ごとに意見が飛び交い，効果的な時間となった。

※「しゃべり場」とは「討論」とは違った協議形式であり，相手の意見を否定してはいけない。また雰囲気も明るく意見が飛び交う特徴がある。

１－３　第２回学生スタッフミーティング（令和元年７月６日）

本ミーティングは開催会場である御茶ノ水の歯学部で実施した。最初に「CHAmmiT」当日の会場である歯学部歯科病院の歯学部創設百周年記念館講堂を見学した。松戸歯学部の河相安彦教授により「日本大学の教育と教育改善活動」の説明をしていただいた。次に歯学部の今村佳樹教授及び小泉寛恭准教授により，当日使用する教室の案内をしていただいた。その後場所を移し，企画骨子の検討を行った。本ミーティング自体２回目であったため，検討会の開始にあたって再度アイスブレイクを行った。スタッフの一部は歯学部１号館に行き，懇親会会場の見学を行った。企画骨子案の検討では，ホワイトボードを用いて６グループがどのような企画を行いたいかをより具体的に話し合った。しかし途中で行き詰まり，具体的な骨子案まではたどり着けなかった。以下の出た案をもとにコアスタッフで詰めることとし企画骨子案の検討を終えた。そして最後に一般スタッフの「企画班」･「広報資料班」へ配属した。今年度は任意形式にて配属を決めた。
以下は各班の企画案である。

1班
　理想の大学生
2班
　未来へ続く自主創造
3班
　自主創造ースイッチ，学ぶ意義，社会
4班
　大学生の見本
5班
　日大自慢
6班
　日大自慢（アクティブラーニング）

1－4　第2回学生コアスタッフミーティング（令和元年8月6日）

本ミーティングでは8月20日に行う教員対象の教学推進ミーティングにおいて発表する「CHAmmiTの振り返り」・ならびに「今年度の企画案」の2つについて議論した。「CHAmmiTの振り返り」では過去6年間の内容の報告を行った。「今年度の企画案」では第2回スタッフミーティング以降の進捗状況も報告した。まずは今年度の目的である。そもそも「学生FD活動とは何か」という目的から再検討を行った。今年度のコアスタッフでは学生FD活動は「教職員のFD活動に関してのフィードバックを行う」とした。それを踏まえると，「CHAmmiT」においてフィードバックを行えているのかと疑問が生まれた。我々はフィードバックをできていないと感じた。当日の参加者にフィードバックを求めることは困難である。従って「学生FD活動≠CHAmmiT」という結論に至った。ではフィードバックを行うためにどうするのかと考えた結果，文理学部や生産工学部に存在する「学生FD団体」を他の学部でも設立するという答えにたどり着いた。自学部の学生によって行われるフィードバックこそがまさに学生FD活動であると考えた。そして各学部の学生FD設立を促進することができるものこそ「CHAmmiT」であると考えた。参加者に「教育改善」に関心を促すことができるからである。以上から今年度の「CHAmmiT」の目的は，「各学部に学生FD団体を設立させるため，より多くの学生のCHAmmiTへの参加を通じて，学生FD活動の認知度の向上」に確定した。そして上記を踏まえた企画案を作成した。前回のミーティングで検討した骨子案は二つに分類できる。第一に，日本大学の教育の特徴や教育理念である「自主創造」に焦点を当てた「日大の自慢」。2つ目は日本大学で身につけたい能力や教育理念の「自主創造」が社会で通用するのかどうかという「理想の日大生」である。しかし本ミーティングでは，1暗に絞り込むことができなかったため，現時点では「日大の自慢」と「理想日大生」の2つの企画案を実施する方向になった。最後に20日の教学推進ミーティングでの教職員とのワールドカフェの準備・各役割のタスクの洗い出しなどを行った。

1－5　学生コアスタッフ企画検討合宿（令和元年8月20日・21日）

1日目は，第2回コアスタッフミーティングで教職員からのフィードバックを修正した内容の報告と共有を最初に行った。次に企画案の発表を行い，教職員からフィードバックをいただいた。その後時間をいただき，別室で学生のみで話し合いを行った。そして再度発表を行い，教職員からフィードバックをいただいた。以上のように健闘を繰り返すことを通じて企画案の内容を深めていき，21日の発表に向けた準備を行った。また，より多くの参加者を募るため，インスタグラムの開設やワールドカフェで動画を流す等の様々な広報活動を考案した。

２日目は，教員対象の教学推進ミーティングで発表する練習を兼ねて企画案の最終確認を行った。そして各学部教員の前で発表を行った。その後教職員と混ざり，ワールドカフェ形式で教職員としゃべり場を行った。

１－６　第３回学生スタッフミーティング（令和元年９月21日）

本ミーティングは，全スタッフが揃う３回目のミーティングであった。合宿から１か月で企画内容に変更箇所が生じた。本来は身につけたい能力や教育理念の「自主創造」が社会で通用するのかを議題にした「理想の大学生」がテーマであったが，教職員と議論を重ね，「そもそも学生と教職員が認識している大学に隔たりがある」とアドバイスを頂き，今年度の目的には大学に対する意識の乖離の問題解決は欠かせないことに気づいた。その結果，「大学とは」というテーマを扱うことになった。以上の変更点を踏まえて，一般スタッフには「今年度の目的」，「2つの企画案」，「ファシリテーションマニュアル」の説明を行った。その後しゃべり場の練習も兼ねて，２つの企画案の実践を行った。その後班活動で企画班はオープニング，エンディング，懇親会の枠組み考案，広報資料班は各学部で教員・職員・学生との写真の撮影を依頼した。以上の流れでミーティングを終えた。ミーティング後にコアスタッフと教職員で集まり，様々な問題を確認した。コアスタッフ内の報連相が不十分であることが主たる問題である。そのためコアスタッフがバラバラな状態になっていた。結果，変更した企画案に関する話し合いをしっかりできていなかったこともあり，ミーティング中の企画案実践はうまくいかず時間超過してしまった。また企画案を２つ実施することは現実的に厳しいことを目の当たりにした。その結果，今回の目的に沿った企画案である「大学とは」に絞り，今後準備をしていくことを決定した。

１－７　第４回学生スタッフミーティング（令和元年10月27日）

本ミーティングでは，前回のミーティングから変更し，企画を１つに絞ってやっていくことに触れ，再度企画案とファシリテーションマニュアルの説明を行った。その後当日の流れをピックアップしてしゃべり場の練習を行った。最後に班ごとの活動時間を設け，当日に向けて準備を行っていた。

１－８　第５回学生スタッフミーティング（令和元年１１月９日）

本ミーティングは，理工学部及び歯学部の開催キャンパスで実施した。最初に，誘導経路の確認を行った。その後，企画案とファシリテーションマニュアルの再確認を行い，しゃべり場の練習を行った。ミーティング終了後，企画班は残り，オープニングとエンディングのリハーサルを行った。

１－９　前日リハーサル・設営準備（令和元年12月７日）

前日準備は午前中に全スタッフで使用教室の設営，当日使用する備品の設置を行った。その後誘導経路と誘導方法について最終確認を行った。午後には企画班はオープニング，エンディング，懇親会班の当日の最終確認のリハーサルの確認を行った。その他スタッフは理工学部の装飾を行い，しゃべり場の確認をコアスタッフ主導で行った。設営に予想以上の時間がかかってしまったが，できる限りの前日準備を行い，当日に備えた。

１－10　令和元年度日本大学学生 ＦＤ CHAmmiT 当日（令和元年12月８日）

当日，全員午前９時に集合し点呼を行った。学生スタッフの当日欠席は４名だった。補填として，コアスタッフと一般スタッフで欠席者のファシリテーター対応する形をとった。午前９時に集合後，受付係は名簿などの確認を行い，企画班はオープニングの準備，その他の学生スタッフは参加者を座席に誘導するため配

置についた。今年度は東洋大学と法政大学の学生の方々も参加した。会場までの誘導は理工学部及び歯学部の教職員に協力してもらい，会場まではスムーズに誘導することができた。
当日は以下のタイムスケジュールで行われた。

10：30～11：10　オープニング

オープニングは，コアスタッフが作成したムービーから幕開けとなった。その後松林肇学務部長と歯学部長本田和也教授からの開会の挨拶，続いて学生スタッフ代表磯部耕志郎からも挨拶があった。そして「学生FDとCHAmmiT」の説明を各年代の教職員の方々にインタビュー形式で行った。その後「企画説明」をあらかじめ撮影した動画を用いて，ニュース形式で参加者に視聴してもらった。そして「しゃべり場の説明」をスタッフが壇上で実演する形式で行った。以上の流れをもってオープニングが終わり理工学部への移動を行った。

11：30～12：30　自己紹介・アイスブレイク（遭難ゲーム）・昼食タイム

誘導が完了した教室より，適宜開始した。11：45までに自己紹介を行い，それからはアイスブレイクとして「砂漠からの脱出」を行った。チームで協力して1つの回答を導き出すことを目的としたコンセンサスゲームである。12：15から解説を行うため，それまで班で楽しく話しあいながらお昼の休憩をとった。答え合わせが終わり次第，休憩もしつつ12：30から学生のしゃべり場をスムーズに始めるため教職員へ移動をお願いした。

12：30～13：20　しゃべり場①　学生グループ　12：40～13：30　しゃべり場①　教職員グループ

ここでは教職員と学生にそれぞれ分かれてしゃべり場を実施した。しゃべり場実施の前に現時点における「大学とは」という問いの率直な意見を記述した。しゃべり場を通してどう変化するかを認識するためである。このしゃべり場で話し合う内容としては，教員・職員・学生がそれぞれ考えている「大学とは」についてじっくり考えて共有することである。しゃべり場①は時間通りに進行した。
内容は以下のものである。

・教職員班
　Ⅰ　自分たち教職員にとっての大学（主観）
　Ⅱ　学生にとっての大学（想像）

・学生班
　Ⅰ　自分たち学生にとっての大学（主観）
　Ⅱ　教職員にとっての大学（想像）

13：30～13：55　しゃべり場②　学生グループ　13：30～13：55　しゃべり場②　教職グループ

しゃべり場2では学生は「他花受粉」を行った。他花受粉とは，ハチが花の蜜を求めて違う花に行くことに由来して，参加者が他に移動して意見を吸収することである。他花受粉で得た新しい意見はメモしてもらい，各自スマホで再度模造紙を写真撮影してもらい，しゃべり場3に備えた。

教職員のグループでは他花受粉は行なわず，しゃべり場3の学生・教員・職員が混合した際に，三者ですぐ共有できるように，しゃべり場1で作成した模造紙をグループ数分複製した。

14：15～15：00　しゃべり場③　学生・教員・職員混合

しゃべり場３ではアイスブレイクの班に戻った。しゃべり場１と他花受粉を通して学生・教員・職員それぞれの意見共有を行った。そしてしゃべり場３では学生・教員・職員混合で行い，それぞれ話し合ってきた学生側・教職員側の模造紙を合体して共有し，しおりに掲載している「大学とは」（**資料１**参照）のワークシートを作成した。

その後作成した「大学とは」に関する意見を共有した。共有の際はあらかじめ用意している定型文をもとに共有した。

15：10～16：00　しゃべり場④　※学生・教員・職員混合学部ごと

しゃべり場４は「大学とは」を議題に，しゃべり場４ワークシート（**資料２**参照）の完成を目的とした。最初に自己紹介も兼ねてしゃべり場３で話し合った内容や共有した。その後「大学とは」という議題を確定させた。その際，授業と結びつけるのが困難な案は採用しないようにした。次に確定した大学に対して「学生が求めるもの」と「教職員が提供できるもの」の観点で話し合い，それぞれの意見を共有した。その結果，学生側と教職員の間で意見一致，不一致」が浮き彫りになった。そして最後に「一致したものは強化案」と「一致しなかったものは解決案」の形式で話し合いを継続した。

話し合いが終わり次第，A3サイズで発表用の資料を作成した。全て終了後，エンディングに向けての誘導準備を行った。

16：20～18：00　エンディング，懇親会実施

エンディングではまず，Googleフォームを利用したアンケートを行った。参加者はQRコードから事前に用意したGoogleフォームにアクセスし，アンケートに回答した。アンケート実施後，しゃべり場４で作成した「大学とは」を理工学部・歯学部・通信教育部の３学部に自学部の学生ＦＤの特徴や取り組みなどを発表してもらった。次に今年度のCHAmmiTの目的でもある「学生ＦＤ」を繁栄させるため，学生ＦＤ団体が存在する文理学部・生産工学部・工学部の３学部に発表をしてもらった。その後，理工学部長の岡田章教授から講評を頂き，日本大学副学長小田司教授からご挨拶を頂いた。またスタッフ代表磯部耕志郎からも挨拶があった。最後に１日を通して撮影した写真を学生スタッフが編集した動画として流し，記念撮影を行い「令和元年度日本大学学生　ＦＤ　CHAmmiT」は閉会した。懇親会では，参加者全員で和気あいあいと食事を取りながら会話をしていた。当日は学生・教職員スタッフ及び参加者の協力のもと大過なく閉幕することができた。

１－11　事前準備から当日までの反省点

今年度は反省すべき点が多くある。まずはコアスタッフの連携が不足した点である。そのため一般スタッフに情報を共有することが遅くなり，変更する箇所が散見されたことや，締め切りに間に合わないことが多々あった。中心メンバーとしてはあってはならないことであった。また企画骨子案を８月の教学推進ミーティングまでに形としなければならなかったことや，全スタッフで作り上げることに意識しすぎてしまい，コアスタッフとしてしっかり話し合う機会がなかったことも原因であったと感じた。

２　参加者の制作物の分析

本節では「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT」の参加者の制作物であるしゃべり場１・４で行った作成物の

分析をする。

しゃべり場１では，学生と教職員が分かれて行った。そこで双方の意見を比較する。

まずは学生の意見である。「学生にとっての大学」では「社会に出るための準備」という意見がもっとも多かった。また「自由」「交流」といった意見も多々存在していた。一方，学びに関しての意見も存在したが主にスキルアップや価値観を広げるなどといったように「社会に出るための準備」の一部に含まれる意見であった。「教職員にとっての大学」では，「職場」・「研究」・「教育」という意見が多かった。また一部では「学び」や「交流」といった意見も存在した。

次に教職員の意見を見てみたい。「学生にとっての大学」では大きな偏りは存在していなかった。「学修」・「交流」・「自由」・「社会準備」の４つが大半を占めて分かれていた。「教職員にとっての大学」では，学生側の意見と同じく「職場」・「研究」・「教育」という意見が多かった。

以上から双方の意見を見ると，「教職員にとっての大学」は学生側と教職員側に大きな隔たりは生じていなかった。「学生にとっての大学」もまた大きな違いは生じていなかった。しかし，１つの疑問が生じる。それは教職員側の学生にとっての大学である。大学とは本来，「学び」の場所であるため「学修」に偏らなかったことに疑問が生じた。理系学部では，授業＝社会準備と捉えられていると感じた。

次にしゃべり場４である。しゃべり場４では各学部の「大学とは」を作成した。以下のとおりである。

学部	大学とは	学生が求めるもの	教職員が提供できるもの	強化案	解決案
法学部	学生・教職員がコミュニケーションを通して，多くの価値観に触れながら，お互いに学びあう場	・アクティブラーニング ・課外学習 ・フィールドワーク	・アクティブラーニング ・英語の授業（留学生受入） ・シラバス	・ゼミでFWの強化 ・留学生交流会強化	・法学部版CHAmmiT
法学部	様々なものに何度でも挑戦できる場	・交流 ・OBOGに合う機会 ・選択肢 ・悩みを相談できる場	・専門知識 ・学生の意見を受け入れる場 ・社会人との接点 ・情報	・告知の質向上	・大学，学部の公式LINEの作成
文理学部	自ら考える場	・他学部交流	・能動的に動ける環境の提供 ・CHAmmiTの参加（単位認定） ・ヒントを与える	・アンケート ・自主創造プロジェクト	・相互履修により他学部講義を受講する

学部	大学とは	学生が求めるもの	教職員が提供できるもの	強化案	解決案
文理学部	試行錯誤する場。価値観を広げる場。やりたいことを実践する場	・学生主体の授業にしてわかりやすくしてほしい	・OB，OG の キャリア公演 ・パワポの自主創造		
文理学部	学ぶ場	・イベント ・質の高い授業	・みんなの考え方に両立させる質の高い授業	・意識の高い人から広げていく	・施設の変化 ・意識を変化させる
文理学部	多様な個性目標を持った人に出会える場	・相互理解の場 ・文理ワールドカフェ ・交流	・フィードバック ・教職員との交流	・文理ワールドカフェ開催	・授業内で他学科交流
経済学部	自主創造する場	・学びへの柔軟な対応 ・教材への工夫 ・教員の人間味	・専門知識 ・価値観 ・考え方 ・社会の生き方	・グループワークを増やす	・三位一体 ・普段の話をする
商学部	自由を活かし，失敗を恐れず挑戦する場 社会に向けて勉強する場	・交流 ・機会 ・単位上限の開放 ・二外の選択	・専門知識 ・考え方 ・FD 活動 ・人脈 ・自由な場 ・単位認定	・他学部交流のチャンスを増やす ・単位認定の強化	なし
芸術学部	専門的変態の歩み	・他学部交流	・カリキュラム	・シラバスのアプリ化	・授業を周知する魅力的なシステム
芸術学部	苦手な必修も様々な人間関係も，すべて学びに繋げ夢を叶える場	・受けたい授業作成 ・平等 ・交流 ・他学科の実習受講 ・他学部交流 ・専門的な話	・面白くてためになる授業 ・学びやすい環境づくり ・興味がないことも社会勉強の提供 ・人とのマッチングを繋げられるように	・将来に繋げられる授業づくり	・授業内容の透明化 ・他学科合同制作等の授業を設ける
国際関係学部	４年間の様々な学びを通して，将来を見つめる場	・学生間の交流 ・受講したい授業を学びたい ・職員の対応	・学生と教職員に意見を交換する場を定期的に開く	意見交換を様々な観点から行う	学生と教職員に意見を交換する場を定期的に開く

学部	大学とは	学生が求めるもの	教職員が提供できるもの	強化案	解決案
国際関係学部	人生に関わりが深く，学びを提供する場	・就活サービス ・専門知識 ・資格 ・人間関係	・情報 ・知識 ・技術 ・可能性	・学生指導の強化 ・受講できる、分野別の講座を増やす	・上に声が届く ・情報発信を向上する ・経費を増やす
危機管理学部	主体的に学び将来について考えることで自分の可能性を広げる場	・多様性 ・他学部交流 ・事務の対応 ・先生の時間	・スキル ・糧 ・人それぞれに合ったもの	・ゼミを早める	・授業の多様性 ・教員と関わる機会をもっと増やす
スポーツ科学部	経験を積む場	・アウトプットする環境がほしい ・班員評価などのものをしてほしい	・授業の工夫 ・評価方法の知識	・学部間連携 ・話し合う場	・他学部を知る機会の提供
理工学部	人材育成の場	・質問が聞きづらい ・情報が知りにくい ・専門科目を増やしてほしい	←学生の要望は提供できる	・学びたい科目を学べる選択	・「学生」と「生徒」の違いを理解してもらう ・質問しやすい場にする
理工学部	遊びの中で悩みを作り，物事の本質を見極める場	・討論する場 ・現場のニーズを知りたい ・ワクワクする授業	・知識の提供 ・考え方の方法論		学生と教員で内容を決める講義を設ける ・講義の中で考える時間を増やす。
理工学部	やりたいことを見つける場	・わかりやすいレール （何をどうすればいいのか，失敗した場合のフォロー）	・来年度からの自主創造の実践 ・キャリアデザインという授業	・大学を強くする ・やりたいことをやってる人を探し出し，知る	授業中にロールモデルを掲示する。
理工学部	色々な交流を経て技術とスキルを身に着ける場	・共通必修の廃止 ・教員との会話 ・奨学金を増やす	・会話 ・環境 ・ゆとりのあるプログラム ・授業の取り方	・学生の意見を学生目線で積極的に取り入れる	・必修単位を自分で決める ・構築カリキュラムの提示もよい

学部	大学とは	学生が求めるもの	教職員が提供できるもの	強化案	解決案
生産工学部	様々な刺激が得られる機会があり，社会に出る前に自分を見つめ直せる場	・専門的なものに触れる機会 ・社会で行われていることにそくした授業	・自己分析セミナーの開設や社会の方々の公演の開催	生産実習プログラムを学生の意見を踏まえて修正し，より詳細を明確にする	一年時から自己分析セミナーや公演の実施
生産工学部	学び×人とのつながり ＝幸せ	・就職したい企業に有利な授業 ・他学科の授業を受講 ・サークル発表の場	・多様な科目→共有科目あり ・学生 FD を知ってもらう場	・学生 FD をポータルのメッセージだけでなくわかりやすくする	・学生の意見をフィードバックするシステム ・サークルや学部 FD を交流する場
生産工学部	自主性，社会貢献コミュニケーション 教員の価値観の転換が必要	・自主創造の時期の再考 ・TA の配属	・学生の要望の見直し ・教員側の教育につながるようにする ・３者の良い関係づくり		・高学年時に自分から変えていく ・生産工学部内でできることは進める
工学部	成長する場	・評価内容の提示 ・講義の内容を就職に繋げる ・興味が持てるものの提示	・幅広いカリキュラムの作成 ↓ ・開示はできる	・学生と教職員の信頼関係を強める ・しゃべり場をいろんなやり方で行う。	・授業評価アンケートのシステムを変更し，随時授業に反映させる
医学部	専門性・人脈・社会活動	・講義によって講師の熱意にムラがある ・部活動をやらせてほしい	・自分の教わったことのみ授ける。 ・コアカリキュラムに沿った指導	・懇談会を開き意見交換を実施	・教員は学生がわかるような言葉を使う ・学生はよく考えて教職員の言葉を受け取る
歯学部	学生と教職員で切磋琢磨する場	・専門科目の早期受講 ・前期の点数開示 ・学生の意見を言いやすい環境	・勉強しやすい環境 ・院内実習を見る機会 ・よい歯科医師像を発見できる環境	・学生の意見をメリットと共に提示	・学生の意見に対して手順を踏んで上に流す。

学部	大学とは	学生が求めるもの	教職員が提供できるもの	強化案	解決案
歯学部	医療人としての未来の自分を作る場	・キャンパス目印 ・学問のおもしろさ ・授業のハンドアウト ・テストを一限にしてほしい	・専門知識 ・見守り ・医療人としての制度（プロフェッショナリズム）	・兼任講師の採用 ・アンケートの活用	・教員が卒業生の進路を示す ・兼任講師の採用 ・教員FDの向上 ・教員間の共有 ・学生，教員間の共有
松戸歯学部	マナーコミュニケーション・知識・技術を身に着け，教職学が三位一体となり，歯科治療を通して地域・社会貢献できる人材を育てる場	・知識 ・技術 ・環境 ・交流	・知識 ・スキル ・経験 ・教職学での交流する機会	・交流機会の充実（ワールドカフェや医療系学部で集まる）	・低学年から歯科授業の導入 ・早期国家試験対策
生物資源科学部	専門知識を学び，自主的に未来への出発点を作る場	・フィードバックが欲しい	・思考力 ・考察力 ・専門知識	・研究を通した相互のコミュニケーション ・研究室に主体的に行く	・フィードバックを行う ・学生も主体的に聞きに行く。
生物資源科学部	人脈や学びなどの暮らしのツールを得られる，学外実習などで実際に専門知識を体験して得られる文理融合の場	・実習に対する設備 ・学費の適切な使用 ・適切なレポート量 ・職員の適切な対応 ・制限のない履修制度	・学生と教員のコミュニケーションの場 ・知識，考え方 ・教員，サービス	・積極的に学生と教員のコミュニケーション	・ルーティンワークのヒント ・学習方法のアドバイス
生物資源科学部	自分の人生を豊かにするためのツール	・専門知識 ・学びの動機づけ	・専門知識 ・人生の方向性を提供 ・国際的な視野	・OBOGの声を届くようにする ・相互のコミュニケーション	・設備の不具合を学校側に伝える ・学びのアンテナをはる

学部	大学とは	学生が求めるもの	教職員が提供できるもの	強化案	解決案
薬学部	学ぶ場所であり，学びを提供する場	・フィードバック	・フィードバック 情報共有	・ウェブシステムの有効活用	授業のアンケートに対する回答をしてもらう。
通信教育学部	学修の場	・学べる環境 ・交流の場 ・システム環境の設備と提供	・オフィスアワー ・情報提供システム	・ピアサポートの活動を啓蒙していく	・教職員会議を減らし，学生と関わる時間を増やす
短期大学部（船橋）	自発性を高める場	・将来の情報 ・議論の場 ・専門的な講義	・研究に基づく専門的な知識 ・設備，サービス	履修科目の増加	・講義映像の配信 ・学年交流

各学部を見比べると，学生が求めるものと教職員が提供できるものには共通するものも存在している。しかしやはり学部独自のものもある。それを解決案・強化案として今後改善していくことに期待したい。

３　参加者アンケート分析

本節では，当日の回答していただいたアンケート結果をもとに「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT」について参加者の視点から考察する。

まずは認知度に関する設問を分析してみる。

1．今回のイベント以前に「ＦＤ」について知っていましたか？

	はい		いいえ		回答なし	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年度	113	48.7%	115	49.6%	4	1.7%
今年度	123	58.9%	86	41.1%	－	－

2．今回のイベント以前に「学生ＦＤ」について知っていましたか？

	はい		いいえ		回答なし	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年度	113	49.0%	117	50.0%	2	1.0%
今年度	109	52.2%	100	47.6%	－	－

上表「ＦＤ」と「学生ＦＤ」の認知度について，去年の CHAmmiT アンケート結果と比較したものであ

る。「ＦＤ」についての認知度は昨年度と比べて約10％上昇している。また参加者の過半数が「ＦＤ」を知っている状況で参加している。「学生ＦＤ」に関しては約3％上昇している。昨年度とは大きな差はないが，過半数を占めている。徐々に本校に「ＦＤ」と「学生ＦＤ」が浸透していると捉えられる。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

1 「令和元年度 日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」は，全般的に楽しめましたか？

今年度	非常に楽しい		楽しい		普通		あまり楽しくない		つまらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全体	70	33.5%	107	51.2%	30	14.4%	2	1％	－	－

2 「学生ＦＤ」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？

今年度	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
全体	189	90.4%	20	9.6%

上記のアンケート結果はCHAmmiTを広げていく上で重要なものである。

「非常に楽しい」･「楽しい」が全体の80％を超えており，「つまらないが」０人であった。これは非常によい結果である。また「学生ＦＤ」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？」では約90％の方々が「はい」と答えている。現状のCHAmmiTの普及率は高くはないとみられるが，今後はCHAmmiTにおいてより多くの参加者を募り，規模が拡大していくことが期待できる。

3 「令和元年度 日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」を通じて，学部に戻り，「学生ＦＤ」について何か行動を起こしたいと思いましたか？

今年度	必ずなにかしたい		機会があればしたい		学生FD組織があれば関わりたい	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全体	32	15.3%	109	52.2%	11	5.3%

思わない		わからない	
人数	割合	人数	割合
17	8.1%	40	19.1%

上記の結果から，約70％の参加者が「学生ＦＤ」に肯定的な意見があった。

またその後のアンケート項目の「行動を起こしたい方にお聞きします。どのような形で今後もＦＤ活動に関わっていきたいと思いますか？」では「CHAmmiTに関わりたい」との回答が約43％を占めていた。一方で，「自学部で学生ＦＤ組織を作りたい」との回答は約25％もあった。今年度の目的として，各学部における学生ＦＤ団体の設立を掲げていた。25％という結果を我々は十分な成果として理解しており，今後の「学生ＦＤ」にとってよい傾向であると捉えている

最後に企画について参加者の視点から考察する。

「令和元年度 日本大学 学生ＦＤ CHAmmiT」で有意義であったプログラムなどはどれですか？」を見てみたい。

オープニング		しゃべり場１		しゃべり場２		しゃべり場３		しゃべり場４	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
27	13%	135	64.9%	93	44.7%	155	74.5%	147	70.7%

エンディング		教職員と交流できたこと		その他	
人数	割合	人数	割合	人数	割合
22	10.6%	110	52.9%	7	3.4%

以上の参加者のアンケートから，「しゃべり場3」が一番多い。しゃべり場３教員・職員・学生が混合で行ったものである。また「教職員と交流できたこと」も約半数は絞めている。つまり，本大学では学生と教職員の間ではコミュニケーションが不足しているのではないかと感じた。教育改善をしていく上では，学生側と教職員の連携はは不可欠である。その点からもやはり学生と教職員の密なコミュニケーションをとることができる「学生ＦＤ団体」は価値があると考えられる。

４　学生コアスタッフ「令和元年度学生ＦＤ CHAmmiT」を通して

４－１「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT を終えて」 磯部耕志郎
（日本大学危機管理学部危機管理学科３年・令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT 学生コアスタッフ代表）

はじめに CHAmmiT に関わった皆様に御礼を申し上げる。今年度は令和初の開催であった。以下に今年度の感想を四点述べていく。

約半年間代表としてまとめようとしてきたが，とても誇れるものではなかった。昨年はコアスタッフの一員として携わってきたが，代表としての景色がまったく異なるものであった。代表を務めて初めて代表という役職の重みを理解した。自分自身このような経験をできたことは間違いなく今後の糧になると感じた。このような機会を提供していただきとても嬉しく思う。

今年度の企画は，自分が扱ってみたいテーマとなった。またこのテーマこそがＦＤをする上で重要ではないかと考えている。教育改善は教員・職員・学生の３者の視点が揃わなければ進めることができない。まずはお互いがお互いを知ることが大切ではないかと考えている。参加者アンケートでは「教職員と交流ができた」ことに充実を感じている声が半数を占めていたことには驚きを感じた。我々スタッフにとっては当たり前のことであったが，その他の学生にとっては貴重な機会であったようだ。

今年で CHAmmiT に関わって３年目になった。例年関わってきたが，教育改善とはとても難しいものであると心底実感した。しかし少しずつではあるが，前には進んでいると感じている。今年度の活動が今後の CHAmmiT の礎になってほしいと願うばかりである。

学生ＦＤが今後も継続的に発展していくことを心から願っている。いつの日か教員・職員・学生の３者にとってよりよい大学になることを期待する。

４－２「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT を終えて」 石原諭衣
（日本大学法学部政治経済学科３年・令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT 学生コアスタッフ OP.ED. 懇親会担当）

私は，今年度の CHAmmiT で学生スタッフとしてではなくコアスタッフとして参加した。

CHAmmiT を知ったのは 2017 年にまで遡る。そもそもＦＤとは，何かも分からずに CHAmmiT2017 の参加者として１年生の時に参加した。去年は，通信教育部から法学部に転籍するための試験対策に専念していた為に，一般スタッフとして参加をしたが，そこでもＦＤが何なのか十分に理解できずにいた。ＦＤを理解できたのは，法学部に転籍した去年の四月であった。

コアスタッフに立候補した理由としては，自分の性格を変えたいと思ったからである。

私の第一印象は,必ずといっていいほど大人しいなどネガティブなイメージを言われてしまうことが多い。そんな第一印象とは違うことを見せたいと思い立候補したが，自分の意見をなかなか出せなくて葛藤があった。その後，葛藤はしていたものの打ち解けることが出来たのは７月の歯学部キャンパスにて行われたアイスブレイクがきっかけであった。アイスブレイクをどのような形で進めるかを，企画班内で打ち合わせを重ねながら行った際に自分の意見が採用された。自分の意見を採用されるためには，どのような事をすれば良いのか自分自身で考え込むことではなく，一般参加者の立場になって考え，人が笑顔になることを考えることが大事だと思えるようになった。

私は，オープニングの台本作りやスライド作りを担当した。教職員と打ち合わせを重ね，至らないところも多数あったが，なんとか仕上げることが出来た。サポートしてくださった教職員の皆様にこの場を借りて感謝を伝えたい。本企画では，自分自身もファシリテーターとして「大学とは」のテーマに関して多くの参加前と意見を共有することができ，満足している。

コアスタッフの活動を通して，自分自身がどれだけちっぽけな存在か認識することが出来た。沢山の人に支えていただいたことを忘れずに自分の歩む道を確立していきたい。弱音を吐きたくなる時もあったが，自分を強くしてくれたコアスタッフ６人，教職員のみなさん，一般スタッフのみなさんに感謝する。

４－３「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT を終えて」 竹田　匠
（日本大学商学部経営学科２年　令和元年度 CHAmmiT 学生コアスタッフ副代表）

はじめに,「令和元年度　日本大学学生ＦＤ CHAmmiT」開催にあたって準備や協力をしていただいた，担当教員及び学務課や理工学部･歯学部の教職員をはじめとする多くの関係者の皆様に厚く御礼申し上げる。

今年，コアスタッフとして参画した経緯は，昨年度は学生スタッフとして参画したが，言われるがままで訳も分からない状態で駆け抜けた一年間だった。そのため,「今年度はコアスタッフとして参画し，企画案を作り上げるところから携わりたい」と強く思ったのでコアスタッフに志願した。

振り返ってみると，初のミーティングから本番終了まで怒涛の半年間であったように思う。そもそも私は人見知りで初対面が苦手な性格であり,「どんな人がいるのか分からない」「いい企画を作り上げていけるのだろうか」など不安と期待でいっぱいだった。初回ミーティング時に副代表になった。それは,「初めてまとめる側に立つという感覚」や「去年は何も分からず過ごした半年間だったので今年何をしたらいいのか分からない」など，自分にとっては不慣れなことの連続だった。加えて，学部も学年も年齢も異なる約５０名という人数をまとめ上げていくことは大変難しく苦慮した。

反省点は，本番まであと「6 か月ある，5 か月ある」などと考え，刻一刻と迫る本番までの時間に対して危機感を持つことなく終わってしまったことにある。達成感はもちろんあったが，企画案から広報に至るまでもっと本気でやれた，妥協するべきではなかった点は多くあると感じる。さらに予広報への協力や夏合宿での企画案の発表など，想定外のことは多くあった。しかし，置かれた状況で自分の全力を出せなかったこ

とは大きな落ち度であると感じる。

また，企画を作り上げていく過程において，チームの良い雰囲気づくり，チームメンバーのフォローやマネジメントなど，副代表として至らない部分が多くあった。自分の甘さや足りない部分を多く自覚することができ，自分の成長にフォーカスすると足りないものを知り成長できた半年間であったので非常に有意義な時間を過ごせた。

学生ＦＤ活動は学生と教員，職員の３者の意見を取り入れることが非常に大切だと学んだ。企画案を検討する中で学生と教職員が求める大学像には隔たりがあり，CHAmmiT を通して話し合いたいと考えることには懸隔があった。しかし，学生ＦＤ活動は学生と教職員が手を取り合って行い，教育を改善してく活動であるため教職員の協力なくしては成り立たないものであり，企画案の選定には苦慮する部分が多くあった。その中で，教職員とともに作り上げた CHAmmiT は大変有意義な時間を共有することができた。

前述したが，企画案は学生と教職員にとっての大学に対する意識の隔たりがあると感じる部分があったこともあり「大学とは」をテーマとした。それは，教職員の方々がどのような考えをもって学生に接しているのか認識することでそれぞれが求める大学像に少しでも近づけ，今後の学生生活が少しでも有意義なものとなってほしいという意味を込めた。

結果として，参加した友人からは「楽しかった」,「有意義だった」との声を頂けた。その言葉に少しだけ達成感のようなものを感じられたし，開催に向けて頑張ってきてよかったと実感できた。今後，このような場が CHAmmiT に限らず増えていくことを切に願う。

最後に，重ね重ねになるが参加者やスタッフ，教職員，関わってくださったすべての方に感謝申し上げる。

また，今年度だけでなくこれまでの CHAmmiT に携わって築き上げてきた多くの関係者がいたからこそ，今年度も開催することができたと感じる。今回のスタッフや教職員，参加者だけでなく，今まで CHAmmiT に関わってくださったすべての関係者の皆様に厚く御礼申し上げる。そして，この CHAmmiT 並びに学生ＦＤ活動，本学の教育改善活動のさらなる発展を願い本稿を終わらせていただく。

４－４ 「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT を終えて」 柴田謙吾
（日本大学国際関係学部国際総合政策学科１年・令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT 学生コアスタッフ OP.ED. 懇親会担当）

私は，今年度の CHAmmiT のコアスタッフとして参加した。立候補した理由は，純粋に CHAmmiT の企画に対して興味を持ったからである。昨年度の CHAmmiT の活動内容を見て，自分も他学部の人たちと交流して一つのことに対して進む気持ちや，中心になって活動していきたいという気持ちがすごくあった。これが私のコアスタッフに立候補した理由である。

それから，CHAmmiT に参加して良かった点は，ミーティングや事前準備，当日の CHAmmiT の活動を通して貴重な経験ができたことである。ミーティングや事前準備では，スタッフの集まりが悪く手間を取ったりしたこともあったが，他のコアスタッフや学生スタッフみんなと CHAmmiT 本番に向けて一つになり，頑張れたことが良かった。CHAmmiT 本番でも同様なことがあったが，たくさんの人に集まってもらうことができたし，参加者の人たちから「CHAmmiT に参加して良かった」と聞くことができて本当に良かったと思う。

反省点としては，あまりミーティング等に参加できなかったことだ。自学部の文化祭の実行委員と兼ねていたので文化祭の日が近くなってからは CHAmmiT で本来やらなければならないことをやらずに疎かにしてしまったせいでたくさんの人に迷惑をかけてしまった。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

今回の CHAmmiT のコアスタッフをやらせていただいて，たくさんの経験ができて本当に良かった。この経験で学べたことを忘れずこれから色々なことに対して頑張っていこうと思う。

４－５「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT を終えて」 稲邉　奨太
（日本大学生産工学部４年・令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT 学生コアスタッフ OP.ED. 懇親会担当）

・CHAmmiT 本番までの自分の感情

そもそも自分がコアスタッフに挑戦しようと思った一番のきっかけが，学生最後にスタッフのリーダーとして先頭に立って，イベントを作り上げる経験をしたかったからである。実際に，OP.ED 班のリーダーになって，班内の雰囲気を盛り上げるために連絡を密に取ったり，交流する機会も多く取ることを意識していた。しかし，卒業研究との兼ね合いもあり，継続して行うことができず，コアスタッフ内での情報共有で完結することが多くなっていた。だが，このような状況でも，OP.ED 班のスタッフが諦めずついてきてくれたことで，どのように見せたら内容が伝わりやすいのか，興味を持ってくれるのかを一緒に考えることができて，他のコアスタッフと同様に信頼できる存在に変わっていった。そして，最終的には，私達にとって最高の OP.ED を作り上げることができたと思っている。

・CHAmmiT に関わって感じたこと

今回，コアスタッフとして日本大学学生ＦＤ CHAmmiT に関わって，感じたことが二つある。それは，「みんなで一つのイベントを作り上げる楽しさ」と「人に支えられるありがたさ」である。1 でも述べたように，1 人ではなく，複数で作り上げたからこそ感じられる喜びや達成感は，何ものにも代えがたい価値あるものだと，改めて感じた。同時に，それを感じられたのは，企画書への新しい意見やフィードバック，備品の準備や設営，進捗状況の確認をサポートしてくださった担当教員及び学務課の職員方。設営のサポートをしてくださった歯学部や理工学部の教職員の方々。そして，定期 MT や当日のしゃべり場などを一緒に盛り上げた一般スタッフ及びコアスタッフ。他にもたくさんの人の支えがあったからこそ，このイベントは開催できたし，成功させることができたのだと感じた。

・感想

正直に言うと，後悔している部分や反省する点は多々あるが，自分のこれからの課題を見つけることができて，社会人になる前に発見できてよかったと思う。また，最後までやり切ることはできたし，班内のリーダーとして，納得のいくイベントを作り上げることはできた。今回の経験を通して，たくさんの人に支えてもらったり，学ばせてもらったので，これからは社会人として，自分から変化を起こして，今回学んだことを生かしていきたい。

・来年，コアスタッフとして活動する人に向けてのメッセージ

自分は，4 年生での経験だったが，まだ時間も余裕もある 1・2 年生で経験する方が成長する速度は段違いだと感じる。従って，やってみようと思ってコアスタッフに応募するもよし。自分の中でコアスタッフでの目標や目的を決めて応募するもよし。ただし，自分で決断したからには，途中で諦めずに最後までやり切ること。

４－６「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT を終えて」 岸部　美和
（日本大学工学部電気電子工学科２年・令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT 学生コアスタッフ広報資料班担当）

昨年度，一般スタッフとして CHAmmiT の企画運営に関わり，もっと深く CHAmmiT について関わりたいと思い今回コアスタッフとして参加した。

CHAmmiT のコアスタッフになり，教員・職員・学生のそれぞれが大学に様々な思いがあり，考えて実際に行動していることが再確認できた。学生からも教員・職員からも日本大学をよりよくしていくための様々な提案や，改善点が提示された。それが現実的か，非現実的なのかに関わらず，全員が日本大学を，大

学での教育をより良いものにしていこうとしているのだと理解した。普段，各学部のキャンパスで過ごしている教員・職員・学生だが，これだけの多くの日大関係者が全学部から集まり，同じ議題について議論し合った結果，日本大学への愛校心がより強固なものになったと感じた。

CHAmmiT に関わることが今回２年目になったのだが，今年度学生ＦＤ CHAmmiT を通じ，教員･職員･学生の三者から多くの意見が出た後だからこそ各学部でそれぞれの抱えている課題をもう一度確認し，今後の課題解決につなげるための話をする機会を設けるべきであると思う。もし，すぐにその機会を設けることができないとしても大学の教育について考えた時間が学生，もしくは教員，職員のそれぞれ個人にあったのならば，長期的にはなるが日本大学はよりよい大学になると思った。だからこそ学生ＦＤ CHAmmiT は今後も続けていくべきだと思う。

そこで，学生ＦＤ CHAmmiT が今後より浸透していくためには大きく３段階あると思う。一つが認知。そして設立, 継続（浸透）である。認知については学生ＦＤ CHAmmiT が大きな役割を果たしていると思う。さらにいうかくならば，新規介入，継続を視野に入れて１年生の初年次教育に学生ＦＤの紹介ををすることだと思う。設立に関しては，学生数の多い日本大学にはどの学部にも学生ＦＤに興味を持っている学生が必ずいると思う。そして，そのような学生が団体を設立できるような仕組みづくりを検討すべきではないだろうか。また，継続に関しては学生だけでなく教員・職員を巻き込み，いかに賛同してもらうかがカギになると思う。ＦＤ活動をしてくださる教職員を増やすことができれば必ず継続し，浸透していくだろう。

今年度学生ＦＤ CHAmmiT を終えた結論として，学生ＦＤ CHAmmiT は短期的なゴールを目指すのではなく，長期的に継続させることが今後の課題になると考えた。

４－７ 「令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT を終えて」 小中　英樹
（日本大学医学部医学科３年・令和元年度 学生ＦＤ CHAmmiT 学生コアスタッフ広報資料班担当）

半年間，私は広報資料班として活動してきた。広報資料班の主な役目は CHAmmiT 本番までのカウントダウン，学部への写真撮影の依頼，参加者募集用のウェブサイトの作成，インスタグラムの公式アカウントの開設ならびに運営，そして前日の会場設営（とくに装飾）であった。初めてスタッフとして参加した私を全面的にサポートしてくださった教員・職員のみなさま，学生スタッフのみなさまに感謝の意を表したい。

この CHAmmiT は当日の参加者はもちろん私たちスタッフにもあらゆる学びと気づきを与えてくれる。

日本で最大の学生数を誇るこの日本大学で，大学の規模感に触れる機会は存外少ない。日本全国で OB や OG が活躍していることは在学生にとっては大きな励みとなっているに違いない。しかしその反面，キャンパスが全国に展開しているため，他学部とほとんど交流しないまま卒業する学生も多いのではないか。今年度の CHAmmiT は大学そのものに焦点をあてて教員・職員・学生が自由に議論する場を設けることができたと思う。他学部交流というのは何も学生同士の交流に限ったものではない。「しゃべり場」を上手に構成することで，教職員の考えと，学生の率直な意見を整理することができた。こういった地道な議論の積み重ねこそが，長期的に教育内容を改善させると信じている。

ひとつ残念なことは，今年自分たちが取り組んだ教育改善活動の成果をすぐに実感することができないという点だ。来年度以降，私たちが議論したことの一部が実際の教育に反映されることを祈っている。

「学部開発」という概念は，教員・職員・学生の三者による教育活動の改善を意味しているが，その三者は議論の場においては対等であるべきだ。しかしながら実際には三者は対等ではない。例えば，学生は単位認定者や成績通知者の教職員に思ったことを言えないことがありうる。別の例を挙げよう。私が在籍する医学部や他のいくつかの学部では，教員から指名される「学年代表・クラス委員」なるものがあり，基本的には教員の要望を学生に伝えるメッセンジャーの役割を果たしている。学生からの要望は手続き上この「学年代表」からしか基本的には受け付けられていない。学年代表者は教職員の助けの下に学年をまとめているの

で，教職員に気に入られるような行動をとる。あるいは些細な学生からの要望は上にあげずに自分たちで解決しようと考える。いわば「マネージャー」体質なのがこの「学年代表」である。

本来あるべき学生ＦＤとはこのようなものとは対極にあるべきだと考える。統治者的発想ではなく，改革者的発想が求められている。何かおかしいと感じたら，自ら積極的にリーダーシップを発揮して，失敗を覚悟で手を挙げる。立場の対等性の基盤には，一定の分離が必要だと考えられる。植民地が宗主国から自治を享受したときのように，改革にはいつだって当局との距離感が求められる。

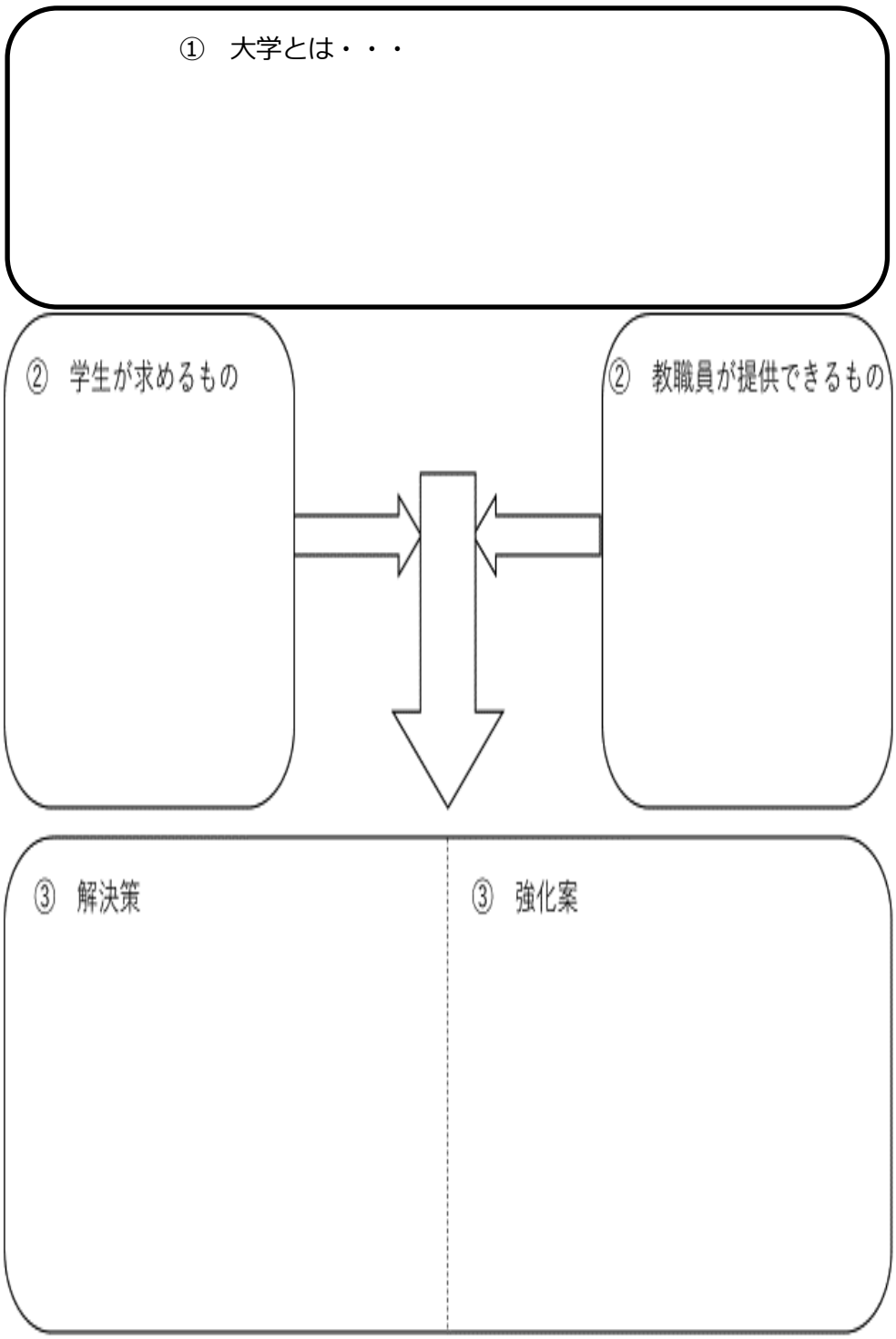
教育改善をピラミッドの建造に例えるなら，教員・職員・学生が互いの立場を尊重できて初めてピラミッドは次の階層へと進むことができる。ピラミッドの頂には汗と涙の結晶としてより優れた大学教育があると信じている。

5　参考資料

資料１

“しゃべり場１”での自分の意見

影響を受けた意見

私にとっての大学とは・・・

資料２